佳作（高学年の部）

夢を叶えてくれて、ありがとう。

福岡県　福岡雙葉小学校　六年
豊田　莉子

「ママ、どうしたら妹を産んでくれるの。何でもするよ。」
それは、私がようち園生の時。小さいころから赤ちゃんが大好きだった私は、どうしても妹がほしくて、毎日のようにお母さんをこまらせていた。クリスマスには、高い夜空に向かって
「サンタさん、かわいい妹をください。」
と、おねがいしていたくらいだ。
六才の十月。私は、お母さんのおなかがふくらんでいることに気がついた。そして、二ヶ月後に生まれてくる赤ちゃんが、この大きなお腹にいることを知らない私は言った。
「ママ、太ったね。」
次の日。
「ママね、体調が悪いの。病院についてきて。」
何も知らない私は、いつもとちがう病院におとなしくついて行った。待ち合い室で周りを見ていると、お母さんのようにお腹が大きい人が多いことが分かってきた。
名前を呼ばれ、病室に入った。そしてお医者さんが、ベッドで横になっているお母さんのお腹に丸いものを当てた。すると、画面に小さな赤ちゃんが映った。私は画面に近づいた。小さな手足に小さな顔。よく見てみると、胸のあたりで小刻みに動いているものを見つけた。心臓だ。こんなに小さな命のこ動があるのだと感動した。お母さんが言った。
「妹だよ。かわいいでしょ。」
私の妹。最初は実感がわかなかったけれど、二ヶ月後に生まれることがわかって飛び上がって喜んだのを覚えている。それからは、お母さんのお腹に話しかけたりさすったりして、妹のたん生を待ち遠しく過ごした。
そして十二月。とうとう夢が叶った。妹が産まれたのだ。妹と一緒に生活ができるようになってから、私は一日中妹のそばにいた。お人形遊びや本を読む時など、何をする時も妹の横で。外出する時も、必ずベビーカーの横を歩いた。
今、私は十二才、妹、五才。最近はけんかもする。妹に対してイライラすることもある。でも、やっぱり妹は、私の一番の親友だ。
何でも慎重な私の横で、妹は天真らんまんに楽しそうに過ごしている。そんな妹に助けられる事も少なくない。これからも良き相談相手で、一番の親友の妹と過ごせる時間を大切にしたい。私の家族や、親友でいてくれてありがとう。お母さん、大切な家族をつくってくれて、ありがとう。